

特別寄稿

## ナラティブの自己性について —Ricœurの物語論を手がかりに—

平 英美\*

### 要旨

本稿は、某研究会での発表録音を書き起こしたものです。簡単なレジメに沿って話したのですが、掲載にあたって冗長な部分や欠落した箇所を適宜補い読みやすくしました。

### はじめに

医療や看護の領域でナラティブという言葉が臨床や研究で目にするのは珍しくなくなりました[注:以下本稿では、「ナラティブ」という語を「語り」あるいは「物語」と区別せずに使っていますが、想定しているのは対面的場面での語りです]。例えば、本学の中川晶先生は、学会活動や著作を通してナラティブ・アプローチの普及を進めてこられ、何よりも心療内科医として臨床で活用し成果を上げておられます(中川, 2020)。多くの人が指摘するように、臨床におけるNBM・NBNや研究方法としてのナラティブ・アプローチの広がりには、患者中心の医療への志向や患者の尊厳を配慮しようとする倫理的態度を背景としています。その際に、患者の語りに耳を傾けることは、橋本さんの言葉を借りるならば、「医療者の立場から患者の経験的世界を理解するためのツールとして」(藤崎・橋本, 2009)を用いることができるのです。

社会科学領域にいる私も、フィールドで患者さんや医療者のナラティブを聞く機会がありました。それらの語りをできる限り理解しようと努め

たわけですが、今に至るまで理解に至らず謎として残したままにしているものがいくつかあります。ここでは、その一つを取り上げ、なぜ理解できなかったのかという反省の意味を込め、ナラティブ・アプローチの可能性について改めて考えてみたいと思います。

### I. ミメーシスの循環

ナラティブの定義は論者によってさまざまですが、もっとも多く流布しているのは、「出来事を並べただけではまだナラティブではない、出来事を筋立てたものがナラティブである」という定義でしょう。このような定義は、言うまでもなくRicœurの物語論に倣ったものです。Ricœurは、三重のミメーシス[行為の再現化]が循環する過程として物語の制作を説明していますが、そのなかで出来事どうしを連関させ筋立てる過程をミメーシスⅡと呼んでいます。そして、ミメーシスⅡの筋立てるという能作を、「統合形象化 [= 出来事を配置させる (configurer) こと]」と名付けています。これに対して、ミメーシスⅠは「前形象化」、ミメーシスⅢは「再形象化」と呼ばれます。筋立て=物語とする見方は、ミメーシスⅡ

\*京都看護大学

を重視していることがわかります。ただ、ナラティブ・アプローチにとって、あまり触れられることのないミメーシスⅠやミメーシスⅢについて検討することや、三者が循環していることを考察に加えることも必要ではないか、というのがここでの私の主張です。

ミメーシスⅠは、物語化される前の経験ですが、それは「先行理解をもたらすような言語実践によって世界のうちですでに表現されている〔世界内〕存在」(Ricoeur, 1987)、すでに言語化された経験だとRicoeurは言います。ミメーシスⅠでは「言語化」がキーワードになっていますが、後で述べるように、彼の言語論は自己論と深く結びついているので物語論、自己論の順に話を進めることにします。

さらに、わかりやすくする？ために、具体例として高齢のALS患者であったAさんのライフストーリーをとりあげます。ある日の訪問でAさんは「昭和15年に元満州国政府職員をしていました」(ミメーシスⅠ)と語り始めました。その後、満州政府職員として5年間活躍したこと、しかし当時の満州社会の悲惨な状況に驚いたこと、その悲惨さが戦後になると我が身に降りかかり、シベリア抑留や、帰国後の開拓の苦難へと続き、結束ではALS患者としての苦悩に結びつけられて語られました。Aさんが取り上げたこれらの出来事は「苦難との闘い」という「主題[Ricoeurの用語]」に統合されるように筋立てられた物語となっています(ミメーシスⅡ)。

Ricoeurの物語論は、ここで終わりません。ミメーシスⅢ、つまり物語を読み解くプロセスが加えることで、物語の語り手(作者)と物語の聞き手(読者)を一体的に扱う視点を提供しています。再形象化するのは聞き手や読者なのですが、その行為によって統合形象化が完結する、あるいは語ること・書くことの「操作性」と聞くこと・読むことの「操作性」が「相互作用する」とRicoeurは言います。とりわけ、私がAさんの語りを聞いた場面のように語り手と聞き手が時空を共にする

場面では、書かれた作品と異なり、ミメーシスの循環がリアルタイムに進行していたと考えられるのではないのでしょうか。聞き手の私はAさんの語りを理解しようと努めながら聞いていましたが、話し手のAさんもAさんで私の反応を確かめながら話を進めていたことでしょう〔この場面のデータを会話分析的に分析すれば、ある程度ですが、語り手と聞き手が行っている再形象化の相互作用を跡づけることができるかもしれません〕。

ただ、この時のAさんの物語は、聞き手である私にとってさほど理解しづらいものではありませんでした。私ぐらいの世代までですと「満州国」「シベリア抑留」といった言葉が何を意味するのか、その言葉の歴史的重みを理解できますし、Aさんも聞き手が重みを共有していることがわかるので、しばしばこの種のエピソードを語ってくれたのだと思います。繰り返しになりますが、理解可能だったのはAさんと私がSchützの言う「同時代人[RicoeurもSchützのこの言葉を使って説明しています]」だったからです。Ricoeurの言葉を使えば、「文化」「共同体」「歴史」を同じくしていることが物語理解を担保している、ということです。出来事を言語化〔これも文化ですが〕することがナラティブへの第一歩でしたが、言語化されない経験、文化に掬い取られない経験はどのように扱えばよいのかという課題が残ります。Aさんのライフストーリーは多くのパターンを聞きましたが、想起されなかった記憶、「語り得ぬもの」は、まだまだあっただろうと想像します。

その課題に向かう前に…。ナラティブの定義に頻繁に使われる『時間と物語』なのですが、この著作におけるRicoeurの狙いは物語論よりも時間論のアポリアを解決することにあつたようです。時間論や次に触れる自己論は彼の生涯を通じて論じられていますが、物語論が前景に出てくるのは『時間と物語』が書かれた頃からです。Ricoeurは、現象学的時間－Husserlが論じているような生きられる時間と宇宙論的時間を繋ぐ時間を模索していましたが、「時間は物語の様式で分節化される

のに応じて人間的時間になるということ、そして物語は時間的存在の条件となるとときに、その完全な意味に到達するということである」と、物語ることがそれを可能にするという考えに至るのです。これ以上時間論に踏み込むことは控えたいのですが、現象学的時間と宇宙論的时间を媒介する時間（の一つ）は暦法的时间と呼ばれています。物語の時間は、実際の出来事（歴史）であれ、フィクションであれ、過去・現在・未来と「分節化」され、暦法を使うことでクロノロジー（年代記）化されます。Aさんのライフストーリーもクロノロジー化されていたと言えるでしょう。

## II. 同一性と自己性

よく知られているように、Ricœurは、物語的自己同一性という概念で物語論を自己論に結びつけています。「物語は行為の〈だれ〉を語る。〈だれ〉の自己同一性はそれゆえ、それ自体物語的自己同一性にほかならない (Ricœur, 1990)」ということです。Aさんは、物語ることによって自分が〈だれ〉であるのかを聞き手に示していることになります。物語的自己同一性は、語り手という一個人の同一性だと捉えがちですが、Ricœurは、正確には「共同体と個人の物語的自己同一性」という表現を用いています。語り手の自己物語は、同時に語り手（そして聞き手）が属する共同体の物語でもあるからです。自己物語は、〈私〉的な物語ではなく、公共性を帯びた〈われわれ〉の物語なのです。語り手は、語りによって自己を聞き手と共に住む世界の中に位置づけている、あるいは、共に住む世界に位置するものとして自己を語っているのです。Aさんの語りを通して、私たちはAさんが生きてきた世界、つまり家族や地域社会、戦前・戦後の日本社会の姿を知ることができますし、そのような世界を生き抜いてきた人としてAさんを理解します。それは、聞き手である私もAさんと同じ世界を生きているということなのです。

この物語的自己同一性は、ミメシスの循環に晒されるため不安定であることを免れません。「人生物語は、主体が自分自身について語るあらゆる真実あるいは虚構のはなしによってたえず再形象化され続ける (Ricœur, 1990)」からです。また、再形象化という言葉が使われているように、聞き手も語り手の物語的自己同一性の創作に協働しています。しかし、同じ出来事でも切り口を変えれば別様に語ることができ、聞き手からも多様に受容されるとしても、言いかえると、自己物語は絶えず構成し直され、物語ごとに異なる自己同一性が生まれているとしても、個々の物語を超える自己が存在する—Ricœurの言葉で「自己維持」があるのではないかという疑問が生じます。むしろ自己同一性という言葉でイメージするのはこちらの方かもしれません。Ricœurは、これに「自己性」という言葉を与えているのですが、『時間と物語』では十分に論じられていません。

この物語的自己同一性のアポリアを論じたのが『他者のような自己自身』(Ricœur, 1990b) ですが、ここでRicœurは、同一性を「何であるか」への答である「同一性」と「誰であるか」への答である「自己性」とを区別することになります〔紛らわしい言葉遣いになってしまっていますが、ここから後の「同一性」は「自己性」と対比される「同一性」です〕。「同一性」としての自己とは、すでに述べたように、「われわれ」としての自己、つまり、「時間的・空間的な枠組み自体の同一性」に「関連づけられて公的な平面に」位置づけられた自己のことです。

他方、「自己性」＝「誰であるか」は、「明瞭な言語で説明できないもの」とであるとRicœurは言います。そのため、物語的自己同一性において言語化される「同一性」が言語化されない「自己性」を「覆い隠す」、あるいは「同一の論理的な力が自己のそれを浸食する」ことになります。ただし、自己性は同一性に覆われているだけで消滅しているわけではありません。Ricœurは、「同一性の支えなしの自己の自己性が剥き出しになる」

場合として「アイデンティティの喪失の仮説、自己喪失に直面するとき」をあげています。ですが、それは同時に、「物語という形態の喪失」、物語の破綻につながります。杉村(1999)によれば、Ricœurが言語化しえない経験として捉えていたものは、「不条理・苦しみ・不安」[縮めれば「情動」]なのです。物語は「生きること、行為すること、受苦することの見えない奥底」(Ricœur,1987)に届くか否かを問われているのです。物語は、出来事を筋立てることで矛盾無く構造化されているように見えるかもしれませんが、覆われた自己性は物語に不安定性や謎を呼び込むのです。AさんがALSを語るとき必ずといっていいほどはるか昔の戦争前後の出来事に結びつけていたことは私には今でも謎です。語り手は「同一性」を重ねた「自己性」を聞き手に語りかけているのかもしれませんが。その自己性はどのようにすれば聞き取れるのでしょうか。

Ricœurは、『時間と物語』と同時期に『生きた隠喩』を著していますが、両者は「二つの対をなす著作である」と述べています。そして、「(生きた)隠喩」と「物語」は、「平行関係」にある、「物語のミメシス機能は、隠喩的指示作用を人間の行動の領域に個別に応用したにすぎない」と、言っています。隠喩的指示作用とは、言葉の字義通りの意味を尊重しないことによって新たな指示作用を可能にすることです。隠喩は、また、言葉の持つ「詩的機能」とも呼ばれます。逆説的な言い回しになりますが、言葉は詩的に作用するとき言語化しえない世界、「現にないもの」を「開示」する働きをもっているというのです。物語についても「物語の詩学」という表現することがあります。単純化が過ぎるかもしれませんが、物語において、同一性は字義通りに語られ、自己性は詩的・隠喩的に語られると言えるでしょう。近年、ナラティブ・アプローチを用いた数多くの優れた成果を手に入れることができるようになっていますが、それらを読んで感動を覚えるのは、語り手や登場人物の自己性を詩的に記述できているからではないか

と思います。次に述べるのは、反対に、物語の詩的機能を読み損なった私の体験です。

### Ⅲ. Aさんの「自己性」

Aさんは人生や病いを周囲の医療・福祉関係者に何度も語っていたのですが、他の人たちはとにかく、私が理解していたのは「同一性」の側面だけだったのではないかとと思っています。Aさんには、保健師、看護師、医師、ケアマネ、理学療法士ほか、多数の医療・福祉の専門職が関わり、それらの人たちが頻繁に在宅訪問をしていました。それは、衰える身体機能を補う最新の機器や可能な行政サービスを導入し、当時としてはかなり先進的な取り組みでした。Aさん自身も、ALS患者のレスパイト入院の要望や患者会の地域支部の設立に動き、積極的に活動をしていました。

そのような折りに、医療・福祉の専門職を聴衆とする研修会の場で、AさんがALS患者の闘病生活について講演をするという機会がもうけられました。Aさんは、シナリオの作成やリハーサルを重ねて講演に備えました。とくに何をどのように話すかというシナリオ原稿の作成には、私を含む複数の人たちが関わることになりました。最初にAさんが用意したシナリオは、ライフストーリー全般に及ぶ膨大な内容からなるものでした。20分という講演枠に収めるために、ALS発症までの体験はほとんど盛り込まれず、闘病生活も医療・福祉専門職による先進的な取り組みに焦点が絞られたものになりました。

しかし、この講演の途中で思わぬハプニングが生じました。講演が半ばに差しかったところでAさんの様子が突然一変し、泣きながら「痛いんです！」と叫び始めたのです。聴衆は驚き、当惑しました。しかし、しばらくこの言葉を繰り返すとAさんは平静になり、もとどおりシナリオに沿って語り始めました。

当初、この出来事を私は、物語の完全な破綻、つまり、Frankのいう「プロットを失った混沌の



語り」ではないか、と捉えていました。しかし、今ではそれに当てはまらなかったと思います。確かに、Aさんは、その瞬間は、「同一性の喪失によって自己性を露呈」(Ricœur, 1996) させ、物語を破綻させているように見えますが、やがて元のプロットに復帰し、「回復の物語」(Frank, 2002) を語り始めているからです [Frank の混沌語りは、物語そのものが失われた状況であり、同一性と共に自己性も失われていると考えられます]。

また、ALSに伴う痛みについては、それまでも何度も口にしていますし、周囲もそれを聞き、十分に対処していました。痛みは言葉を使って他者に伝えることが難しいと言われますが、池田 (2016) は、そうではないと述べています。彼は、「痛い」と言うことや痛い時に人が発する擬態語は、まず、自己の身体に向きがちな注意を世界へ反転させることで痛みを軽減させる働きをもち、さらに、痛みの発声は、他者へ向けた「懇願、質問、命令」の発話行為であると指摘しています。

それでは、Aさんは、なぜ講演のときに痛みを訴え始めたのでしょうか。池田が言うように痛みの発声が聴衆に向けた発話行為—何らかの社会的意味を持つ働きかけであったのですが、それは何だったのでしょうか。「痛いんです！」という言葉は、何を隠し何を言語化しようとしたのでしょうか。問題は、シナリオにありました。先述したように、Aさんが講演で話すことになったのは、結局、医療・福祉の実践とそれに対する感想にとどまりました。それは、医療・福祉共同体に適合的な病いの語りであり、Aさんもその物語創作に参加し、共有していました。

ただ、Aさんにすれば、語らずに済ませたことがあまりに多すぎたのです。Aさんは、日頃の訪問時にはいつも、痛みだけでなく、病いに伴う心身の悩みを語っていました。中川 (2020) は、「人に語るによって形をなすのが苦悩といえる。最初に存在するのは混沌とした感情であり、ただただ苦しいのである。それが語られることによっ

て苦悩という感情をともなった物語が紡ぎ出されるのである」と、述べていますが、私たちはAさんが苦悩を物語化することを封じてしまっていたのです。

語り手は、語りのなかで、行為が帰属され続ける主体として他者に対する応答責任を負っていると、Ricœurは考えます。物語的自己同一性、とくに自己性は、自己維持するという倫理性を含んでいます。Aさんは、苦悩や痛みを語らないでは語り手としての責任、あるいは、自分がALS患者であることの責任を果たせないと直感したのだと思います。痛みを語ることで、一気に「受苦することの见えない奥底」を浮上させたのです。私はこれがAさんのパフォーマンスだったとは思いますが、演出的効果は非常に大きく、聴衆もまた既存の物語的自己同一性を書き換えるような再形象化を迫られたのではないのでしょうか。繰り返しますが、「痛いのです！」という発話は、ALS患者Aさんの苦悩をメタファーし、聞き手の自己を再形象化に導く言語行為だったのです。

最後に、Ricœur (2010) は、自身の死を前にして未完に終わった『死まで生き生きと』の「死」について記した断章に「今ならこう言おう。責任と正義の倫理のために自己性を哲学的に防衛する。死に備えるためには自己性を断念する」という言葉を残しています。「死に備えるために自己性を断念する」とは、何を意味しているのでしょうか。防衛される自己性については、今回ある程度、触れることができました。次は、死を前にした自己性、例えば終末期における自己性の在りようや物語化との緊張関係について議論を進めていきたいと思っています。

## 文献

池田喬. (2016). 言葉を使って痛みを他人に伝えることはできるか—痛みの表現における発話行為と比喩の使用についての考察. 看護研究, 49-4, 276-284.

- Frank, A.W. / 鈴木智之. (2002). 傷ついた物語の語り手－身体・病い・倫理. 東京：ゆみる出版.
- 藤崎和彦・橋本英樹（編著）. (2009). 医療コミュニケーション. 東京：篠原出版新社.
- 中川晶. (2020). 看護教育にいかすナラティブ・アプローチ－第4回臨地実習協働運営交流会講演会記録. 京都看護, 4, 1-12.
- Ricœur, P.. (1975) / 久米博. (1984). 生きた隠喩. 東京：岩波書店.
- Ricœur, P.. (1983) / 久米博. (1987). 時間と物語Ⅰ. 東京：新曜社.
- Ricœur, P.. (1985) / 久米博. (1988). 時間と物語Ⅱ. 東京：新曜社.
- Ricœur, P.. (1985) / 久米博. (1990). 時間と物語Ⅲ. 東京：新曜社.
- Ricœur, P.. (2003) / 久米博. (1996). 他者のような自己自身. 東京：法政大学出版局.
- Ricœur, P.. (2007) / 久米博. (2010). 死まで生き生きと－死と復活についての省察と断章. 東京：新教出版社.
- 杉村靖彦. (1999). 物語と自己の探究－物語的自己同一性をめぐって. フランス哲学・思想研究, 4, 68-83.